



その生家

野田の生家は血統が伝わっている。現在は山崎姓を名乗り当主は山崎一二三と云う二十六歳の青年である。即ち一二三君の父が三太郎、其先代が茂右衛門、其先代も同じく茂右衛門、其また先代の名は不明だが其の弟が光導である。

出家の動機

光導行者は子供の時から常人と異ったところがあった。農家だから毎日田畑に出て仕事をするが、我家の田と他家の田との見さかひがなかった。例へば自分の家の畑を耕しつつ他家の畑まで耕してやる。「いったい他家の畑をどうするのぢや」両親が叱ると「さうですか」と云ってけろりとしてゐるといふ風であった。もつともこれでは百性は勤まらぬと一時京都に行つてゐたのであるといふ。但し京都で勉強した形跡は認められない。其の出家の動機は母親の死去にあるらしい。当時、大聖寺の城下に松縁寺といふ浄土宗の寺があつて、其の近所の某の世話で同寺に入つて剃髪した。此の世話をした某といふのは今は大聖寺町字五軒町にある東川といふ桶屋の先祖である。その縁故で光導行者は在世中よく此の東川氏の家に来た。因みに光導さんの俗名はわからない。

荒谷巖窟中の修行

領内、舟見山の麓荒谷の鶴ヶ瀧近くに大きな巖窟があつた。此の中に八九年籠もつて修行された。年齢は三十前後であつたらしい。しかし自分の考へでは巖窟の修行は一回ではなかつたやうに思はれる。時代を隔てゝ二三回も籠もられたのではないかと思ふ。

色情狂の女につき纏われて弱つたといふのは若い時代の話らしい。弟子の光念、西念の兩人を伴れて籠もつたといふのは五十を過ぎての事らしい。何れも常食はソバ粉であつたといふ。頭の頂辺に香をたいて念仏を申したと伝えられている。毎日、蛇が一匹姿を顕わて光導行者の念仏を聞いたとかの説話の伝わっているのも此の時代の事らしい。因に此の巖窟も今では跡方もないように破壊された。鶴

ヶ淵の近くに新道が出来て其の工事に岩石を使用したからである。

其の弟子

光導行者に三人の弟子があつた。一は光念、二は西念、三は光庵である。光念は領内四十九院村の馬方であつたが二十三四の頃に弟子になり、光導行者から三光院を譲られたが明治十二年に師匠に先き立つて没した。

西念は越中の生まれで不具者であつた。青年時代に加賀の山中温泉場に来り木地引のロク口廻しに雇われていたが其の風来態度が可哀想だといつて光導行者が引取つて弟子にして世話をしたが後に狂人になつて死んだ。

光庵は邦谷村の富豪辻野市郎兵衛の後身である。辻野家が没落してから四十四歳にして光導行者の弟子となつて出家し五十五歳で没した。

牛馬小屋の建設

光導行者がある年、江州を巡遊したとき木ノ本付で牛馬が惨殺されるのを見て惻隱の情に堪えず、帰來、木ノ本行きの牛馬は一切三光院で養つて天命を終らしむるから伴れて来いと云つて各村をふれ廻つた。それで那谷村に四間に七間の牛馬小屋を造り男を一人雇つて之の世話をさせた。其の費用は付近の各町村を廻り富豪などから寄付せしめて之に當てた。牛馬が天命を終へて死ぬると直に附近の山中に埋めた。此の時代に一つのエピソードがある。或る村に一匹の馬が居つたが性質凶暴で飼主に噛みつくこと数回に及び俗に人食馬と云つた程であつた。逆も厄介で仕末がつかんから本ノ本へやうと云つてゐたのを光導行者が聞いて、例の牛馬小屋に引取つたところが、此の馬は小屋に入つてからも荒れ狂つて小屋の羽目板を蹴り破るやら、全く仕末に困り誰が行つても之を馴らす事が出来なかつたが光導行者が行くと不思議に温順になつたと云ふ。無心の馬も其の徳になつたものとみえる。

其の歌

光導さんの歌集があらう等とは夢にも思つてゐなかつたところが、先達て綾部の岩田鳴球氏から貸與せられ一読して驚いている。その序文を見ると此の写本の出来た次第がわかる。

「那谷の三光院主光導と云へる念仏の行者浄安寺四十八夜別寺中結縁として修業中、歌学に志すところもなく唯心にうかむ一首の道歌四十八首口 づらねてにをはもなくして有りのまゝなるを書きうつして与ふものなりと云爾。

口知山 天保十一年子梅月 寶阿

今この中より二三首抜いてその道歌がどんなものであつたかを御紹介しよう。

舟はかぢ扇子はかなめ往生は

南無阿弥陀仏の決定のしん

元祖のおしへをきけばたゞとなへ

六字のうちにかみもほとけも

弥陀佛のおもひつめたる六字なり

唱ふるばかりぬける道なし

此の外に「無智の行者道歌集」といふ写本の中に三十八首のこつてゐる。

前書には「無智の念佛光導行者歌三十八首感の余り書写して」と書かれてある。

前同様寶阿の筆である。此の中より二首抜いてみる。

唱ふればここに居ながら極楽の

蓮花のうちに寝たり起きたり

死ぬるとは夢にもさらに思ふなよ

往きて生るる浄士なりけり

愚鈍念佛安心抄

光導行者はどこ迄も信仰の人であつた。決して学問、弁舌の人ではなかつた。

だから著書などと云ふものが有らうとは誰も思はない。ところがその著述として

「愚鈍念佛安心抄」一巻があるから驚ろかざるを得ない。しかも木版本で文久元年八月の板行である。

奥書に「北国無智念佛行者光道謹誌」としてあるが勿論板下を自分で書かれたのではない此の書は念仏安心の概要を示されたのであるが光導行者としては之だけの文章が書けさうな道理がないからその大略の主旨を口授して誰かに作つて貰われたのであらうと思はれる此の書の最後のところに「安政己年四月上旬より南越丹生郡某の寺にて四十八願の報恩のため別時念佛中此書をしるし終る」と記してあるのを見て其の製作年代がわかる。

其の行実

光導行者は何処迄も説話中の人物である。今故老の話聞くと大概其の人となりを知る事が出来る。

其一 光導行者があるとき路を歩いて居たが誤つて川に落ちた。ところが其の近くに百姓が田圃を耕して居て「光導さんが川にはまつた。さア大変だ」といつて走つて行つてみると水面に顔だけ出して念佛を唱へつつ流れてゐるので、皆して引上げると念佛を唱へつつさつさと歩いて行かれた。其の態度は極めて落つたものであつたと云ふ。因みに光導さんは少しも泳げなかつた人で本来ならば当然溺死するところであるが川に落ちても少しも動ぜない為一命を拾つたわけだ。

其二 光導行者は一切生物を殺さなかつた。身籠に蚤やシラミが沢山居つても決して殺さずにとつて捨てた。魚類は一切口にしなかつた。あるとき一人の老婆がソバを振舞つた。光導行者は「此のダシは鯉節のダシではないかな」と云つて訊ねたところ婆さんは「精進ダシです」と云つてだましたところが一口食うや否や鯉ダシの事がわかつたので婆さんの前に行つて何にも云わず大声で「南無阿弥陀仏」を繰返し繰返し唱えたので婆さんはつひに泣き出して終つた。食物はお粥やらソバ粉やらで路傍に落ちてゐる菜葉なんか決して其のまゝにしては置かない。勿体ないと云つて拾つて帰つた。説教もされたが極めて下手であつた。身体の極めて小柄なそのくせ大きな錫杖をいつもついて歩いた人だつた。

其三 いつも鼠色の法衣を着て丸い大きな帯を締て居られた。身長の低い五尺に足らぬ小さい身体だったが綺麗な顔をして居られた。説教は時々されたが余り上手でなかった。今夜は光導さんの御説教があるがまた松虫鈴虫のお話だらう」と云った位だからイツモ同じ話をされたものと見える。物を粗末にするといふことが大の嫌ひで例へ梅干をたべても、肉のある根りしやぶつて核が白くならねば止めなかった。

其四 寒いと去ふので信者が衣服をおあけすると其の次に来る時にはもう着ていない。なんでも乞食が居るとスグやったとの事である。

其五 物欲が少しもなかった人でした。辻野家で綿入を作つて上げるとその明けの日に乞食にやつてしまつて、「寒い寒い」と云つてまた辻野家にかけてまかれたと云ふ話が伝わっている。

#### 其の墓碑

光導行者の墓は石川県江沼郡那谷村三光院の境内にある。ここに行くのには北陸線の粟津駅で下車、温泉電軌会社の電車に乗替へて那谷駅で下車、それから約一町ほどで三光院に達する。今日でも見るから気の毒なほどの荒れ寺である。五十を過ぎた尼さんが此の寺の留守居をしてゐる。だが光導行者の墓石は寺に不似合なほど大きい。今日では特志の者でない限り参詣する人もないらしい。加賀の四温泉と云へば天下に有名である。シシで名高い山中温泉、松茸で名高い山代温泉、それから粟原、粟津の二温泉を加へて四温泉といはれてゐる。その何れかに遊んだ人は必ず一度は那谷寺（ナタと読む）の観音さんに遊ばない人は少ない。

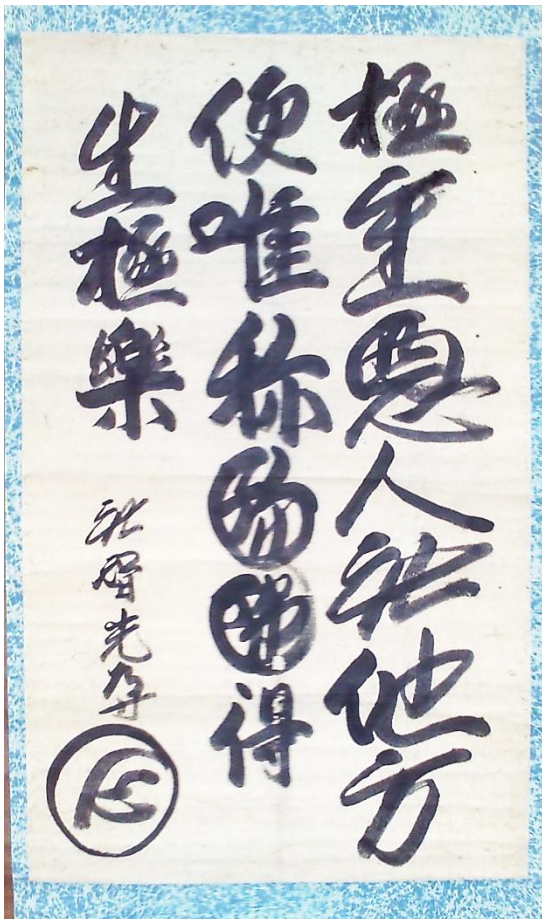
此寺は真言宗の寺院であるが庭園がとても立派で北歴の名園として天下に著聞してゐる。此の真言宗那谷寺の門前に貧しい三光院があるのは何という皮肉であらう。

#### 「三光院の光導様」 本谷俊子

私は小学校の頃、郷土読本を教わりました。旧江沼郡内の事がいろいろと書いてありました。那谷町については、三光院の光導様の事が書かれていました。浄土宗のお寺です。今の前野医院の前に建っていました。小さい頃、学校から帰ると、友達と皆で遊びに行き、まりつき石けり等したお庭の一角にある一風変わったお墓の文字を時折ながめていました。

光導さんは、江沼郡の野田町に生まれた方で、自分には厳しく、他の人には親しみ易い偉いお坊様だったそうです。私が本谷家に嫁ぎ、はじめての暮の報恩講でおいさんの手伝いをしていると、床に掛けられた軸が光導様の書かれたもので、聞いてみると、この人の書かれたものは少ないので大切にしなければならぬと言われました。

この軸を見る度に、心なごみ、洗われる様な気がします。私達の知っている庵主さんは女の方で、その人の亡き後は坊主の方が無くなり、今の福祉会館に移されました。三光院の御本尊の横にあります。木像が光導上人の御像だそうです。何か心に残るものがありましたので記しました。



29 小松市那谷町 本谷家 光導書



## 光導行者略歴

- ・ 亨和二年（一八〇二）江沼郡潮津村字野川（現在の加賀市野田町）の農家の次男として生まれる。
- ・ 文政三年（一八二〇）ごろ母親の死を期に出家、大聖寺鉄砲町松縁寺の徒弟となる。
- ・ 文政年間、松縁寺につれられ京都知恩寺へ修業に行く。しかし修業や勉強はあまりしなかったようである。
- ・ 文政年間後半から天保年間前半、京から戻り舟見山麓荒谷の鶴ヶ滝近くの巖窟に入り八〇九年修業を行なう。
- ・ 天保年間、三光院に住する。後述の三光院に残されている光導書の名号牌に天保九年（一八三八）四月の銘があるので、それ以前に三光院に入ったことになる。

・ 弘化年間から嘉永年間に光念、西念、光巖の三人の弟子を得た。最初の行脚に出たのもこの頃とみられる。その後計四回の行脚を終え再び三光院に落ち着き、牛馬小屋を建てたり、各地に供養塔の造立を行った。また津幡町倉見に修業道場としての専修庵を建てた。

・ 明治十年、三光院を一番弟子の光念に譲り隠居した。しかし光念が明治十二年に亡くなり、光導もその二年後の明治十四年二月二十一日に三光院にて八十歳で入寂された。

光導は読み書きがやや苦手であったようで、その書は弟子による代筆も多いのではないかと思われる。光導は歌を詠むのを好んだのであるが、光導が詠んだ歌を弟子が書き留めていたのではないかと言われている。

また光導の俗名は、生家の山崎家でも不明とのことである。



32 小松市那谷町 三光院 光導木像

## 三光院

小松市那谷町の浄土宗寺院で、本寺は加賀市大聖寺鉄砲町の松縁寺である。明治十四年の光導没後は、女性が二代庵主を務められた。しかし昭和二十八年からは無住となった。そして建物は取り壊され、仏像等は那谷町福祉会館に移された。また石塔などは共同墓地へ移された。その後金沢市菊川二丁目の覚源寺が三光院を兼務されていた。

二〇〇九年十月、三光院が再興された。鎌倉の浄土宗大本山光明寺の布教師である中塚時眞氏が三光院を兼務され、以前に三光院があった場所の建物を改築された。これまで那谷町福祉会館に置かれていた仏像等を、新しい三光院に移されて、開眼法要が行われた。三光院の仏様は、約六十年ぶりにもこの場所に落ち着かれた。

## 光導の名号塔など

### 01 魚津市諏訪町 浄土宗大泉寺境内 名号塔

平成六年(一九九四)尾田氏、平井氏の橋地藏調査に同行した。光導名号塔は墓地の入り口に建てられていたのだが、現在は境内の別の場所に移されている。名号の左下には光導の署名と花押が入っているのだが、「無智光導」の署名は光導の真筆ではないように思える。

明治十一年五月の建立であり、この頃光導は晩年(七十七歳くらい)で、三光院を弟子の光念に譲り隠居生活を送っていたと思われる。高齢の光導が遠く魚津まで行脚を行なったであろうか。それ以前に書かれた書をもとに、後年に建てられたとみるのが正解ではないだろうか。大泉寺住職によると光導の書などは残されていない。



### 02 魚津市島尻 路傍 名号塔

島尻集落の路傍のコンクリート製小堂内に、地藏などとともに納められている。小堂内であり、彫りが浅いので文字が読みづらい。中央に大きく「南無阿弥陀佛」と刻まれ、明治十二年の造立銘が入っている。名号の左下には光導の



署名・花押がみられるが、名号の文字に比べて極端なほどに小さい。

諏訪町大泉寺の檀家による造立とみられ、大泉寺境内の名号塔の一年ほど後に建てられている。このころ光導は晩年(七十八歳くらい)であり、この名号塔も造立に直接関与することはなかったと考えられる。

### 03 富山市西番 共同墓地 常願寺川供養塔

安政五年の大地震、大洪水の犠牲者の供養のために、その二年後の萬延元年(一八六〇)に建てられている。

正面に大日如来像を彫り、「光明真言供養塔」と刻んでいる。

丸い文字の名号は左側面に刻まれているが、光導の署名・花押などは入っていない。

このころ光導は五十八歳くらいであり、各地を行脚し供養塔の建立を行っていた。



### 04 高岡市坂下町 浄土宗極楽寺墓地 名号墓標

墓地のいちばん奥に歴代住職の墓があり、その中に光導書の名号を刻んだ無縫塔が建てられておられる。やや小ぶりの無縫塔で、中央に「南無阿弥陀佛」の文字が刻まれているが、光導の署名・花押は入っていない。蓮弁が彫られた台石には「十四世中興応上人」と刻まれて





いる。応誉上人は光導と時代が大きく異なるので、この台石は取り違えたものと思われる。

**05 高岡市伏木本町 浄土宗教会 名号塔**

浄土宗伏木教会は白金町の浄土寺が兼務されている。名号塔は境内の隅にポツリと建てられている。丸い文字の「南無阿弥陀佛」と光導の花押の間には署名が入っていたと思われるのだが、剥落が激しく確認できない。また年号などは入っていないようである。



**06 氷見市小境 浄土宗大栄寺 門前 名号塔**

私は実見していない。改修の際に破棄されて、現存していないのは残念である。署名、花押、年号等が入っていないかったのだろうか…。



**07 氷見市小境 室谷家 名号書**

大栄寺檀家の数軒が光導の名号軸を所蔵されているそうであるが、そのうちの一幅である。



大栄寺の名号塔と若干筆跡が異なるようだ。大栄寺の名号塔の元になった書は、別の檀家が所蔵されているのだろうか…。

**08 七尾市小島町 浄土宗西光寺墓地 名号墓標**

西光墓地に光導書の名号が刻まれた小さな舟型一般墓標を確認している。



**09 七尾市小島町 浄土宗宝瞳寺境内 名号塔**

山の寺院群内、宝瞳寺の山門を入ったすぐ左手に、地蔵と並んで建てられている。名号の左下に光導の署名・花押が刻まれているが年号等が入っていないようだ。住職の話によれば寺は火災によって焼けており、名号書などは残っていないそうである。石で造られた名号塔や地蔵が燃え残ったようだ。



**10 中能登町良川北 路傍 名号塔**

良川北の旧道の路傍に、地蔵と並んで建てられている。地蔵の由書が建てられており、それによればこの場所はもと処刑地であった。ここで処刑された人たちの供養のために光導が名号塔を建てたのであろう。名号の下に光導の署名・花押が刻まれている。弘化三年（一八四六）の銘があり、光導四十五歳頃である。





### 11 羽咋市千代町 路傍 名号塔

千代町集落の一角に、徳本名号塔などとともに建てられている。名号の下に光導の署名・花押が刻まれている。弘化二年（一八四五）の銘があり、光導四十四歳頃である。光導の署名、花押がみられる。先の良川北の名号塔の一年余り前に建てられており、この頃が光導最初の能登行脚であったとみられる。



### 12 津幡町倉見 浄土宗専修庵 光導位牌

専修庵は光導が創建した修業道場で、倉見の人たちによって守られてきた。位牌には「善蓮礼法譽上人孝導行者老和尚」と書かれている。後述の三光院にも光導の位牌があるが、表記が異なっている。



### 13 津幡町倉見 浄土宗専修庵

#### 光導顕彰碑

専修庵の向かいに建てられている。前面の主文（主尊）部分がひどく剥落しており、まったく不明である。しかし左下に「光



■「花押」が残っているので、ここには光導書の名号が刻まれていたのではないかと推測される。

専修庵由緒には倉見の人たちが光導の功績をたたえて建てたと記されており、光導の墓標ではないようだ。

### 14 金沢市七ツ屋町 真宗大谷派円休寺墓地 名号墓標

円休寺墓地の奥に、ひととき大きな墓標が建てられている。丸い文字の名号の下には光導の署名・花押が入っており、蓮座が刻まれている。右側面に嘉永元年（一八四八）の銘が入っている。柏野屋の墓標であり、右となりには天保十年銘の柏野屋の総墓が建てられている。柏野屋は、現在では子孫が途絶えている。



### 15 金沢市山の上町 浄土宗善導寺墓地 名号墓標

善導寺墓地の無縁墓標群内に、光導書の名号を刻んだ小ぶりの一般墓標がみられる。署名・花押などはなく、間を詰めて並べられているので側面は確認できない。



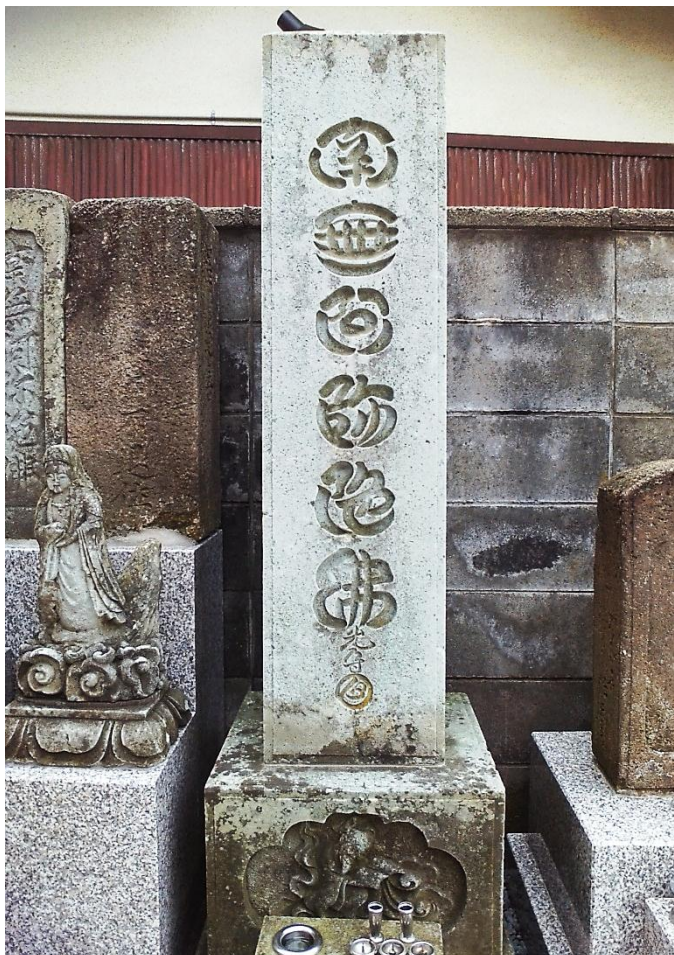


### 16 金沢市泉二丁目 浄土宗念西寺墓地 光導墓碑

念西寺は旧北陸道(北国街道)に面しており、越前方面から金沢に入った時、最初にたどりつく浄土宗の寺院である。光導は金沢での布教活動を行なう際、この念西寺に長期滞在したようである。また能登方面や越中方面への行脚の際にも、那谷からの最初の宿泊地であったと思われる。

境内の一角に歴代住職の墓が並んで建てられており、その右に光導の墓が建てられている。中央に大きく光導書の「南無阿弥陀仏」が、その下には光導の署名・花押が刻まれている。右側面には「明治十四年二月二十一日往生」と刻まれている。また台石には光導の像が彫られている。

住職の話によれば、境内改装の際に動かされたのだが、その時に遺骨(分骨)が納められているのが確認されたそうである。三光院にあったとされる光導の墓碑は、現在はその所在を確認できないので、光導の遺骨が納められたことが確認される唯一の墓碑である。



### 17 金沢市泉二丁目 浄土宗念西寺墓地 名号墓碑

境内の一角に無縁石塔(墓碑)などが集められており、その中に光導書の名号を記した小ぶりの墓碑が一基みられる。右側面に大きく「灰塚」と刻まれている。ここ念西寺において光導と関わりの深かった奥泉家の墓碑である。



### 18 金沢市泉二丁目 浄土宗念西寺 名号書三幅

念西寺には光導書の掛軸が三幅残されている。

写真右の軸の像は天神と思われるが、その両脇に光導が名号等を書き添えたものと思われる。

写真中央の軸は大きく「南無阿弥陀仏」と書かれ、その下に光導の署名・花押が入っている。力強い筆勢で光導の思いが伝わってくるようである。

写真左の軸は「南無阿弥陀仏」の名号の左に「極重悪人無他方便 唯称弥陀得生極楽」、下に「無智光導(花押)」と書かれている。

これらの三幅の軸はいずれも光導書の特徴がよく出ており真筆とみられる。「極重悪人無他方便 唯称弥陀得生極楽」は、大日本仏教全書31往生要集にこの一説が説かれている。

極重悪人は他の方便無し

唯弥陀を称すれば極楽に生きるを得んと



**22 金沢市寺町三丁目 浄土宗大円寺境内 名号塔**

門前の徳本名号塔の裏に、塀をはさんで背をあわせるように建てられている。

安山岩(戸室石)製の笠付き六角柱型で、正面に大きく「南無阿弥陀佛」と刻まれているが、「陀」の文字から下の表面が剥落しており、署名・花押等が入っていたのかわからない。

右前面に「天保十二年五月七日／香譽上人祐道和尚」、左前面に五名の戒名、左後面には「天保十五甲辰三月立之／能登屋宗助」と記されている。

大円寺は数十年前、新しく道路が造られたときに寺域が大きく削られた。住職によれば、その際無縁墓標等が処分されたそうで「それまでは丸文字の名号が彫られた墓標が数基あった」とのこと、現存していないのは残念である。また名号が書かれた書なども残されていないそうである。



**21 金沢市泉二丁目 浄土宗念西寺 光導位牌**

念西寺では新しく光導の位牌を作られ、毎月二十一日の光導の命日にお経をあげられるようになった。また境内を改装され、納骨塔を新しく建てられた。歴代住職や光導の墓は境内の別の場所に移された。境内は明るくきれいになり、光導の墓も汚れが落とされて美しさを取り戻した。



**23 金沢市寺町五丁目 浄土宗浄安寺墓地 名号墓標**

凝灰岩製で正面中央に「南無阿弥陀佛」と刻まれ、その下に光導の署名・花押が入っている。右側面に「天保十二丑年五月十三日」と「昭和二年五月十三日」とが並んで刻まれている。また左側面には「越中屋／喜三右衛門」「越島／外次郎」と記されている。越島家の墓標である。





## 24 小松市北浅井町 路傍 名号塔

北浅井町の路傍に地藏と並んで建てられている。角柱型の石塔で下部を地中に埋められている。摩滅が激しく正面の「南無阿弥陀佛」の名号もはつきりとしなない。右側面には先の「極重悪人無他方便 唯称弥陀得生極楽」が刻まれている。また左側面に細かな文字が刻まれており、「…南無あみだ…」の文字のみがかるうじて読み取れる。これは光導が詠んだ歌であろうか。名号の筆跡からみると、もともになった書は光導の真筆ではなく別の人物による光導の写しではないかと考えられる。



慶長五年（一六〇〇）浅井礮合戦の戦死者を追善するために建てられたと伝えられている。小雨降る間夜に亡霊が刀や槍を持って迷い現れるため、那谷の三光院の住職が追弔のため建てたといわれている。

## 25 小松市那谷町 共同墓地 光導名号塔

那谷町墓地の一角に三光院関係の石塔数基が並べて建てられている。そのうち丸い文字の名号塔は三基あり、いずれも一見すると全て光導の書のように見えるのだが…。

向かって右側の名号塔は中央に「南無阿弥陀佛」の名号が、その左に「無智光導（花押）」が、そして右に「善導大師傳書」とあり、右側面には「明治十年九月建立之」と刻まれている。丸い文字の名号は、他の光導の名号とは

やや異なった書体である。

光導が京都で修業した際に善導大師の書を写したものであろう。おそろく筆などあまり待った事もないと思われる光導が一生懸命何度も書き写した…その姿が目に浮かぶようである。

光導晩年の建立であり、三光院を弟子の光念に譲った頃と思われる。自身の書の原点である善導大師書の写しを残そうとしたのであろうか。

## 26 小松市那谷町 共同墓地 光念名号塔

中央の名号塔は中央に「南無阿弥陀佛」の名号が、その左下に「佛譽光念」、左側面に「為三界萬靈佛果」、そして右側面には「明治十年九月建立之」と刻まれている。これは光導の書ではなく、光導の一番弟子光念の書である。



**27 小松市那谷町 共同墓地 光厳名号塔**

向かって左の名号塔は中央に「南無阿弥陀佛」の名号が、その左下に「辻克巖」、右側面に「明治二九年七月三十日」と刻まれている。これは光導の三番弟子光巖の書である。光巖は「辻」姓ではなく「野」であり、野を略したのであろうか。刻まれている日付は三光院に残されている光厳の位牌の「明治二十九年七月三十日」と一致しており、この石塔は光厳の墓標と思われる。



これら三基の名号塔は、一基が善導大師の書を光導が写したもので、二基が光導の書を弟子が習ったものであり、光導名号塔研究において貴重な資料である。この三基の名号塔をはじめとする三光院関係の石塔群は、墓地の他の墓標とは反対の方向を向いて建てられている。三光院が取り壊され、共同墓地に移された際、三光院の方を向いて建てられたのではないかと思われる。

**28 所在不明 名号書**

昭和十三年発行の『江沼郡郷土読本』第七項「光導さん」に掲載されている。「南無阿弥陀佛」の名号の周りを大きな円で囲み、その下に「光導(花押)」が書かれている。旧三光院にあったものだろうか…。



**29 小松市那谷町 本谷家 光導書**

本谷俊子著「三光院の光導様」に掲載されている。「極重悪人無他方便 唯称弥陀得生極楽」と大きく書かれて「無智光導(花押)」が入っている。「弥陀」の二文字が丸い文字となっている。現在も本谷家が所蔵されている。

**30 小松市那谷町 浄土宗三光院 名号牌**

位牌群の中に、白木に丸い文字の名号を墨で書いた、位牌と同じ形態のものがある。光導の署名や花押は入っていない。裏面には「天保九年戊戌四月廿九日」と書かれており、光導が三光院に住してまもない頃のものと思われる。この頃はまだ花押がなかったのだろうか…。記銘年次の確認される、最も古い光導の書である。



**31 小松市那谷町 浄土宗三光院 光導位牌**

先の専修庵にも光導の位牌があるが、この位牌は「善蓮社法譽光道大行者」「明治拾四年二月貳拾一日」と書かれている。専修庵の位牌と表記が異なるのは気にかかることである。三光院には、弟子の光厳の位牌もみられる。



**32 小松市那谷町 浄土宗三光院 光導木像**

三光院の仏像群の中に、黒塗りの逗子に納められた僧形の木像があり、光導像と伝えられている。彩色された丸彫り座像で、なにかをしつかりと見ているような感じの姿である。いつごろ、誰の手により作られたのだろうか…。



### 33 小松市那谷町 浄土宗三光院 名号塔

平成二十六年、三光院住職の中塚時眞氏によって境内に新しい光導名号塔が建てられた。花崗岩製の立派な角柱型石塔で、十月の法要で落成式が行われた。



### 34 小松市牧口町 牧姫塚(蟬丸塚) 名号塔

石川県小松市の南部、栗津温泉街近くの牧口町の水田の中に牧姫塚がある。またここは蟬丸塚という説もある。町内の八坂神社が所有、町内会で管理されており、この塚の中に建てられている五輪塔一基が市の文化財に指定されている。またこの五輪塔の他に、五輪塔の残欠二点、灯籠二基、光導名号塔一基が遺存する。

#### 「牧姫」

牧姫は平安時代末期の皇女と伝えられるが、詳細は不明である。訳あって都よりこの地に流され、この場所で没したとされている。五輪塔は京都の白川石(花崗岩)製で、牧姫の供養塔として建てられたと伝えられている。

#### 「蟬丸」

蟬丸は平安時代前期の歌人で、滋賀県大津市の逢坂の関に庵を構えていた。小倉百人一首の「これやこの行くも帰るも分かれては知るも知らぬも逢坂の関」でもよく知られる。歌を詠みながら旅を続けていたのだが、福井県越前町(旧宮崎村)野の農家で滞在中に病死した。遺言に従い、その場所に蟬丸の墓が建てられた。しかし蟬丸が小松市牧口町に訪れたという記録は残っていない。

光導名号塔は、五輪塔のすぐ横に建てられている。地上高八十八センチメートルほどの砂岩製で、粗く四角柱に加工されている。正面に大きく独特の丸い文字で「南無阿弥陀佛」と刻まれているのだが、その下は土中に埋まっており、光導の署名や花押が入っているのはわからない。



左側面には「明治十／＼六月／建之／奉／蟬丸」の銘が読み取れ、蟬丸の供養塔として建てられたことがうかがえる。また右側面には「善導大師■■■■」の文字が刻まれている。

蟬丸は生没年不明であるが、旧暦五月二十四日に没したと伝えられ、新暦では六月二十四日が蟬丸忌となっている。この名号塔は「六月建之」と記されているので、蟬丸忌にあわせて建てられたのであろうか。光導晩年の造立であるが、那谷の三光院から近いので、光導が造立に直接関与した可能性が高いのではないかと思われる。

### 35 小松市原町 共同墓地 名号墓標

この共同墓地のある場所は中世の寺院跡と伝えられており、寺谷と称され

ている。この墓標は墓地入り口の左奥にある中世の石塔のすぐ後ろに建てられている。大きな無縫塔であるが、名号以外は何も刻まれていない。この墓地から百メートルほど離れた場所に、昭和戦後まで寺院があったという。この寺院の名前や宗派が不明であるが、この墓標はその寺院に関係するものようである。



### 36 小松市原町 共同墓地 名号墓標

35の墓標のすぐ右に建てられている。正面には丸い文字の名号のみが刻まれており、左右の側面に合わせて六名の法名が刻まれている。「釋…」と刻まれている。台石には「長田」と刻まれている。台石に長田と刻まれている墓標はこの隣に二基あるが、一基は倒壊している。原町には長田姓の家はなく、管理所有者不明である。



### 37 加賀市篠原町 実盛塚 名号塔

実盛塚は光導の生家から一キロメートルほどのところにある。

〔篠原古戦場 実盛塚〕

寿永二年（一一八三）五月、俱利伽羅の合戦に敗北し、逃げ惑う平家軍の中で、ただ一騎踏みとどまり戦ったのが斎藤別当実盛であった。しかし手塚太郎光盛に討ち取られ、劇的な最期を遂げた。その実盛のなきがらを葬ったと伝えられているのが実盛塚である。応永二十一年（一四一四）、時宗十四代遊行大空上人が篠原の地を巡錫中に、実盛公の霊が現れ、上人が回向したらたちまち成仏したと伝えられている。

名号塔は大きく土盛りされた塚の中腹に建てられている。丸い文字の名号の下には光導の署名はなく、花押のみが入っている。右側面には小松市北浅井町路傍の名号塔と同じ「極重悪人無他方便 唯稱弥陀得生極楽」が刻まれている。名号の筆跡も北浅井町のものと同様であり、同じ人物による光導の写しではないかとみられる。

「萬松院殿覺翁禪門」嘉永二年三月■とあるが萬松院殿覺翁禪門が誰なのか不明である。台石に「六道の苦患を救う此六字 唱へてくれよ参る人々」の歌が刻まれており、光導が詠んだ歌と思われるが筆跡は光導のものではないようだ。



### 38 加賀市野田町 山崎家 名号書

光導の生家である加賀市野田町の山崎家に、光導の名号軸が残されている。山崎家の現当主の宏一氏は光導の兄、茂右衛門の直系六代目子孫である。

丸い文字の名号の左には「父母こふよのため無智光導(印)」と書かれている。「こふよ」は「孝養(こうよう)」である。光導が父母の供養のために生家



に書き残したものとみられる。残念ながら年号が入っていないのだが、「無智光導」の下には花押ではなく印が記されてところをみると、花押がなかった頃のものではないだろうか。



### 39 加賀市野田町 山崎家

#### 数珠(光導遺品)

山崎家には光導の数珠も残されており、珠のひとつひとつに「南」「無」「阿」「弥」「陀」「佛」の文字が刻まれたもので、生涯念仏を唱えることを教えた光導らしさが伝わる。



### 40、41 加賀市野田町 共同墓地山崎家墓所 名号墓標二基

野田町共同墓地の山崎家墓所に、光導書による名号が刻まれた墓標が二基

みられる。この二基は一つの台座上に並んで建てられており、この台座には大きく「光導」と刻まれているのだが、これは後に作られたものである。

向かって右の墓標は、光導書の名号の下に蓮座が彫られており、その左に「■：■行者光導(花押)」と刻まれているが、年号などは入っていない。

向かって左の墓標は、正面は光導書の名号のみであり、右側面に「死之後ハ我身にそへる宝ニハ 南無阿彌陀仏ニまさるものなし」の光導が詠んだ歌が刻まれている。また左側面に「弘化四年丁未七月/光導」と刻まれている。歌や年号は光導の書ではないようだ。

最初この二基の墓標は光導の父母のものではないかと考えたのであるが、光導は父母の供養のために生家に名号軸を残しており、弘化四年の造立にも疑問が残った。後日、山崎宏一氏のお姉さんより「山崎家のお寺さんの過去帳に、茂右衛門の母が弘化四年二月に亡くなられたと記されている」との情報を得た。光導の兄が茂右衛門で、その長男も同じく茂右衛門である。

過去帳に記されている茂右衛門が前者(光導の兄)だとすると、その母は光導の母にあたり、文政三年頃に亡くなったとされる記述と合わない。したがって過去帳に記されている茂右衛門は後者(光導の甥)となる。そしてその母は光導の兄の奥さんということになる。このことから向かって左の墓標は、光導の兄の奥さんのものではないだろうか。とすれば、一緒に並んで建てられている右の墓標は光導の兄さんのものなのだろうか。：





#### 42 加賀市山中温泉荒谷町 路傍 名号塔

光導は京都知恩寺での修行後、三光院に入るまでの八〇九年間、鶴ヶ滝近くの洞窟に入り修行を行った。

荒谷集落のはずれ、鶴ヶ滝の上り口に石仏や石塔が建てられている。コンクリート製の小堂内に、光導書の名号塔が納められている。以前にもこの



あたりを調査したのだが、春まだ浅く残雪があり発見できなかった。

凝灰岩製の小ぶりの石塔で、中央に「南無阿弥陀佛」が刻まれている。その右上に「天下和順」、左上に「日月清明」、右下に「あら谷村中」、左下に「無智光導(花押)」が入っている。前面左端にかすかに文字があるようだが、はっきりとしない。

堂の扉はコンクリートで固められているので、取り出すことができない。間から手を入れて側面と裏面とを確認したのだが、銘文等が入っていない。光導がこの場所で修行を行ったのは文政十一年頃〜天保八年頃と考えられるので、修行を終えた直後の天保八〜十年頃に造立された可能性が高いのではないだろうか。

#### 43 加賀市百々町 路傍 名号塔

加賀市百々町路傍に二基の名号塔が並んで建てられており、向かって右が光導書のものである。

名号の右に「西生院殿 ■■■ 為菩提立 ■」と刻まれている。これは斎藤

実盛の院号であり、この名号塔は光導が実盛の供養のために建てたものである。また名号の左には「…■戊午従三月那谷三光院 光導(花押)」とあり、光導五十八歳頃の安政五年(一八五八)造立である。



#### 44 あわら市中川 路傍 名号塔

浄土宗松龍寺から百メートルほど離れたところの、路傍の堂内に納められている。松龍寺へは以前にも幾度か訪れていたのだが気づかずに前を通り過ぎていた。

凝灰岩(笏谷石ではない)製の大きな石塔で、正面中央に大きく「南無阿弥陀佛」と刻まれているが、光導の署名・花押は入っていない。左側面下部に「天保十三寅歳造立之」と記されている。



「南無阿弥陀佛」の「南」の文字が三角おにぎりのような形をしている。三角形にやや近い形のものも他にもみられるのだが、これほどはつきりとした三角形のものはここだけである。また「南」以外の文字についても、光導の筆跡の特徴と異なるところがあるので、もともなかった書は別の人物による写しではないかと思われる。



#### 45 坂井市坂井町長畑 路傍 名号塔

旧北国街道の一里塚があつた場所に、おはや・良作地藏堂があり、向かい合つて光導名号塔が建てられている。

「おはや・良作」

加賀藩家臣安達弥兵衛の二男の良作と、同家で下女をしていた商家秋本屋平助の娘のはやは恋仲となつた。しかし互いの親の許しを得ることができず、文化十三年五月、良作は家来の松原八右衛門を連れ、はやとともに金沢城下を出奔し駆け落ちした。良作とはやは夫婦約束の証文を身に付けていた。そのあとを追つてきたはやの母そよが、はやを連れ帰ろうとした。良作は説得をしたが、そよはこれに応じず、やむなくそよを斬り、はやと心中した。良作は父への遺言状を書き、金沢へ帰つて届けるようにと八右衛門に託したが、八右衛門も後を追つて自害した。良作と八右衛門の遺体は金沢へ運ばれ、はやとそよは近くの演仙寺で葬儀が行われた。良作とはやは最後まで夫婦と認められることはなかつた。

おはや・良作地藏堂には現在、五体の地藏が納められている。中央に丸彫りの立像、その足元に小さな丸彫りの座像が四体である。四体の座像の中には「俗名為了作(良作)」や「俗名為早(はや)」と記されたものがあり、いずれも背面に文久元年冬の銘が入っている。

おはや・良作地藏堂の向かいに建てられている光導名号塔は凝灰岩(笏谷石)製で、笠付き角柱型である。福井地震で倒壊したときのものだろうか、笠と台石とに破損がみられる。

正面に大きく「南無阿弥陀



佛」と刻まれ、その下には光導の署名・花押が、右に「善導大師」、左に「無智」と入っている。左側面に「天保十二辛丑三月吉日／念佛講中」と、右側面には「志してのち わがみにそゆる たからにハ なむ阿みだぶに志くものハなし」の歌が刻まれている。これは光導が、おはや・良作の供養のために詠んだ歌と思われる。光導三十九歳頃で、この七年後に建てられた生家である山崎家の墓標に、同じような歌を残している。

#### 46 越前市横根町 天台宗横根寺境内 名号道標

四角柱の石塔で、正面に丸い文字の「南無阿弥陀佛」が刻まれており、その下は土中に埋もれている。その土を掃つてみると、光導の署名・花押、そして「義仙」の文字が確認できた。義仙



という人物によつて建てられたのだろうが、どのような人物なのかは不明である。

右側面に「右おちさん道」、左側面には「左よこ子くわん音」と記されている。「おちさん」とは越智山のことで、これは大谷寺の山号である。また「よこ子くわん音」とは横根観音(横根寺)のことであり、この道標はもと横根寺登り口の路傍に建てられていたと考えられる。

#### 47 京都市左京区田中門前町 浄土宗大本山知恩寺墓地 名号墓標

北陸三県以外では、京都市の浄土宗大本山百萬遍知恩寺の墓地内に光導書体の名号墓標を一基確認している。知恩寺五十七世巨東の墓標である。正面に大きく丸い文字の「南無阿弥陀佛」が刻まれ、その左右に「當山五十七世」「縁山六十三世大僧正瑞譽巨東上人」、そして右側面に「天保十

三千寅歳七月二十日」と記されている。署名や花押などは入っていない。

巨東の墓碑に刻まれている名号の書体は、北陸地方でみられる光導のものと酷似している。しかしこれが巨東自身の書である可能性も否定することはできない。



## 円形文字名号

光導書の名号は円形文字名号である。一般に円形の文字の名号といえ、宝珠名号が思い浮かぶのではなからうか。宝珠名号はコンパスと定規とで書かれたような書体で、究極のデフォルメの感じである。輪郭線を書いて、その中をぬりつぶさなければならぬ。しかし光導の円形文字名号は、普通に筆で書かれた書体である。その意味するところは同じなのであるが、すぐに直接結びつけることは危険であると思う。光導が手本とした善導大師書と伝えられる名号書の所在が気かりである。知恩寺には円形字の名号書は残されていないという。

## その他の資料

光導に関する資料は極めて少ないのだが、次のようなものが残されている。

- ・『福田行誠全集』の中に、行誠と光導との交友の記録がみられる。
- ・射水市の光山寺の『光山寺大佛再興略縁由』に、光導が大仏再建に関与している記述がある。

## 光導の歌

加賀市の徳田作次郎氏編の「光導さん歌集」および、『江沼郡郷土読本』の「光導さん」に掲載されている光導の歌のいくつかを紹介しておこう。

船はかち扇子はかなめ往生は

南無阿弥陀仏の決定のしん

元祖のおしへをきけばたゝとなへ

六字のうちにかみもほとけも

佃陀仏のおもひつめたる六字なり

唱ふるばかりぬける道なし

唱ふればこゝに居ながら極楽の

蓮花のうちに寝たり起きたり

死ぬるとは夢にもさらに思ふなよ

往きて生るる浄土なりけり

たゞだのめよるすのつみはふかくとも

我本願あらぬかきりは

みだたのむ人をむなしくなすならば

我此よにて神といはれじ

光導の花押は、丸の中に「心」である。合掌。



光導資料 ●名号塔 ◎名号書 ○その他

富山県

01	魚津市諏訪町	大泉寺境内	明治11年	1878	●
02	魚津市島尻	路傍	明治12年	1879	●
03	富山市西番	共同墓地	萬延元年	1860	●常願寺川洪水供養塔
04	高岡市坂下町	極楽寺墓地	年号なし	----	●無縫塔
05	高岡市伏木本町	浄土宗教会	年号なし	----	●
06	氷見市小塚	大栄寺門前			●現存しない
07	氷見市小塚	室谷家			◎大栄寺檀家に数幅

石川県

08	七尾市小島町	西光寺墓地	年号なし	----	●
09	七尾市小島町	宝幢寺境内	年号なし	----	●
10	中能登町良川	路傍	弘化3年	1846	●
11	羽咋市千代町	路傍	弘化2年	1845	●
12	津幡町倉見	専修庵			○位牌
13	同	同門前	明治16年	1883	●光導頭彰碑
14	金沢市山の上町	善導寺墓地			●一般墓標
15	金沢市七ツ屋町	円休寺墓地	嘉永元年	1848	●
16	金沢市泉2丁目	念西寺境内	明治12年	1879	●光導墓標 台石に光導像
17	同	同	年号なし	----	●一般墓標
18	同	念西寺	年号なし	----	◎
19	同	同	年号なし	----	◎天神像
20	同	同	年号なし	----	◎
21	同	同	平成21年	2009	○位牌
22	金沢市寺町3丁目	大円寺境内	天保15年	1844	●
	同	同墓地			●一般墓標数基あったが現存しない
23	金沢市寺町5丁目	浄安寺墓地	昭和2年	1927	●一般墓標
24	小松市北浅井町	路傍			●浅井暇戦死者供養塔
25	小松市那谷町	共同墓地	明治10年	1877	●光導書
26	同	同	明治10年	1877	●光念書
27	同	同			●光巖書 光巖墓標
28	所在不明	所有者不明			◎江沼郡郷土読本に掲載
29	小松市那谷町	本谷家	年号なし	----	○書
30	小松市那谷町	三光院	天保9年	1838	◎名号牌
31	同	同			○位牌
32	同	同			○木像
33	同	同境内	平成26年	2014	●
34	小松市牧口町	牧姫塚	明治10年	1877	●蟬丸供養塔
35	小松市原町	共同墓地			●無縫塔
36	同	同			●一般墓標
37	加賀市篠原町	実盛塚	嘉永2年	1849	●斉藤実盛供養塔
38	加賀市野田町	山崎家	年号なし	----	◎
39	同	同			○数珠(光導遺品)
40	加賀市野田町	共同墓地	年号なし	----	●山崎家墓標
41	同	同	弘化4年	1847	●山崎家墓標
42	加賀市山中温泉荒谷	路傍			●
43	加賀市百々町	路傍	安政5年	1858	●斉藤実盛供養塔

福井県

44	あわら市中川	路傍	天保13年	1842	●
45	坂井市坂井町長畑	路傍	天保12年	1841	●おはや良作供養塔
46	越前市横根町	横根寺境内	年号なし	----	●名号道標

京都府

47	京都市左京区田中門	知恩寺墓地	天保13年	1842	●巨東墓標
----	-----------	-------	-------	------	-------